

**筑西市第4次地域福祉計画
策定のための市民懇談会
結果報告書**

**令和3年11月
筑西市**

目次

I 実施概要	1
1. 市民懇談会の目的	1
2. 市民懇談会の実施方法	1
3. 全4回の概要	1
4. 各回の実施手法	2
II 実施結果	6
1. 下館地区A	6
2. 下館地区B	15
3. 関城地区	26
4. 明野地区	34
5. 協和地区	42

I 実施概要

1. 市民懇談会の目的

地域に住んでいる市民の皆さんから、地域の現状や課題、地域を良くするためのアイデアなどをお聞きし、「筑西市第4次地域福祉計画」策定のための参考資料とすることを目的に実施しました。

2. 市民懇談会の実施方法

市内4つの地区（下館、関城、明野、協和）に基づく5つのグループ（下館地区A^{※1}、下館地区B^{※2}、関城、明野、協和）に分かれて、地域の課題や、地域を良くするためのアイデア、今後地区で取り組む重点プロジェクトなどを参加者が主体的に論議に参加し、相互に刺激し合い学び合う、ワークショップ形式で開催しました。

※1・・・下館北部地区、下館地区

※2・・・下館西部地区、下館南部地区

3. 全4回の概要

日程	場所	実施内容について
第1回 8月20日（金）	【書面開催】	第3次計画の評価・課題の抽出 第3次計画の自助・共助の取り組みについて、できていること、できていないことに振り分け、課題を洗い出します。
第2回 9月13日（月）	【書面開催】	前回の課題をまとめ、その課題に対するアイデアを出し合う 第1回の課題に対して、解決アイデアを考えます。
第3回 10月19日（火）	下館武道館 2階	重点プロジェクトの検討 第2回のご意見を共有しながら、重点プロジェクトとして特に取り組んでいきたいと思うことを決定します。
第4回 11月2日（火）	下館武道館 2階	とりまとめと発表 これまで話し合ってきた内容をとりまとめ、発表を行います。

4. 各回の実施手法

◆ 第1回【書面】第3次計画の評価・課題の抽出

(1) 「第3次計画の自助・共助の取り組み」ができているか記入

「第3次計画の自助・共助の取り組み」について、地域で「できていると思う」か「できていないと思う」かを記入しました。

基本目標1 福祉意識を醸成する仕組みづくり	地域の状況	
	できていると思う	できていないと思う
第3次計画の自助・共助の取り組み		
1 意識啓発・教育について		
■まずは「知る」ということから始める 各自が、地域福祉について知り、何をしたらよいか、何ができるか考えましょう。	○	●
■自分のこととして捉える 日常生活の中で自分の身に降りかかった時に初めて福祉を意識することが多いため、そうなる前から意識的に地域福祉について考えるようにしましょう。	●	○
■地域でのふれあい 困った人がいる時、すぐに手を差し伸べられる大人に育てるには、地域の中で子どもの頃から障がい者や高齢の方々とのふれあう機会を増やしましょう。	○	●

(2) できていない理由・地域の課題を記入

地域で「できていない」ことについて、その理由など、地域の課題を記載しました。

基本目標1 福祉意識を醸成する仕組みづくり	できていない理由など、地域の課題
	<ul style="list-style-type: none"> ・困ったときはまず地域で助け合うという、地域福祉の考えが根付いていない。 ・子どもでも楽しめるようなイベントを企画しているが、若い世代との交流が少ない。

◆ 第2回【書面】課題に対するアイデアを出す

第1回の結果として同じ地区のメンバーがあげた課題を見ながら、今後取り組みそうだと思うことや課題を解決するためのアイデアを考えていただきました。

下館地区A「福祉意識を醸成する仕組みづくり」の課題

子ども達と一部の地域の方々であればイベントはあるがメンバーが少なく、組織が縮小している

全体・自治会など大きな単位での交流は調整が難しい

中心人物や地域福祉リーダーが不足している

質問：課題に対し「こんな取り組みができればいいな」ということを右のページに記入してください

例えば…

- 関心のない人が「地域福祉」を自分のこととして捉えるためには？
- 地域の子どもや若者が障がい者や高齢の方々とふれあう機会を持つためには？
- どんなことだったら地域の人と話せる？
- 趣味のグループが活動を続けるためには？
- 活気のあるグループはどんなことができるだろうか？
- 地域福祉リーダーを増やすには？
- 交流の場に活用できそうな施設や空きスペースはどこか？

3

ご自由にお書きください

メンバーのアイデアを参考にしたり
具体化したたりでもいいですよ

すでに下館A地区から
いただいたアイデア

たまり場の送迎もできたらやりたい。

公民館を活用して話をしたりお茶を飲んだりするたまり場のようなものはないか。

4

◆ 第3回 これまでの内容共有・重点プロジェクトの検討

(1) 自己紹介

自己紹介カードに「お名前」「あなたが普段行っていること」「この地区の好きなおところ」を記入し、同じグループの人に共有しました。



(2) 第2回までの内容をグループ内で共有
グループごとに準備された第2回（書面開催）までのとりまとめの結果から、自分が書いたものを手に取って、もとに戻しながらグループ内で共有しました。



(3) 重要なものにシールを添付

第2回のアイデアの中で、特に自分たちで取り組む必要があると感じる課題や取り組みに、各自シールを貼りました。



(4) 重点プロジェクトを決定

全員がシールを貼り終わったら、シールの数を参考にして、この後に掘り下げて話し合う、重点プロジェクトを決定しました。

重点プロジェクトの内容について、掘り下げて検討しました。



◆ 第4回 とりまとめと発表

(1) 発表の準備

第1回・第2回で出た「課題」と「解決策」の紹介と、「解決策」の中で何を重点とし、第3回で話し合ったかの流れがわかるよう結果をとりまとめました。



(2) グループごとに発表

1グループ 10分以内で発表を行いました。



(3) ギャラリーウォーク

他のグループでどのような話し合いが行われたか、模造紙を見て回る「ギャラリーウォーク」を行いました。



II 実施結果

1. 下館地区 A

総括（第4回の発表内容）

第1回では、課題として次の意見があげられました。『福祉意識を醸成する仕組み』については、「少子化が進み地域の交流が活性化していない」、「中心的活動をしてくれる人がいない」、「地域福祉のリーダーが不足している」、「交流イベントのメンバーが少なくなり組織が縮小している」。『地域活動を促進する体制づくり』については、「地域連帯感の横のネットワークが不足している」、「コロナ禍で会議等が開催できず関係団体と意見交換がはかれない」、「地域の中で孤立化が進み若い子育て家庭などにおいても相談する場がないなど、どんな支援があるか公助・共助のための手段や情報を知らない家庭が多くなってきている」。『安心して暮らせる環境づくり』については、「個人情報の取り扱い、相談、サービスの提供、防犯、防災については、以前にも増して大変難しい問題となってきている」です。

第2回では、これらの課題に対して、「地域の交流」、「世代間の交流」、「居場所づくり」、「ボランティア地域活動」、「会合や連携」、「支援が必要な人の把握・支援」、「ウェブの利用」、「防犯・防災」、「制度サービスなどの情報共有」といった解決アイデアが出てきました。

第3回では、これらの解決アイデアの中から、『地域・世代間の交流～あいさつからはじめよう～』、『気軽に集まれる交流の場づくり』、『支援が必要な人の把握・支援』の3点を重点プロジェクトとしました。

『地域・世代間の交流～あいさつからはじめよう～』の具体的な取り組み内容は、「声かけ運動の推進として、会ったらあいさつをする」、「常にご近所の人と仲良くし、話などを聞いてあげる」、「若い人が地域活動に参加しやすい環境づくりに努める」、「自治会の単位で市の出前講座を活用し、地域の交流を深める」です。

『気軽に集まれる交流の場づくり』は、「公民館等を活用し、気軽に集まれるスペースを提供する」、「地域の人が気軽に集まれるイベント等を企画する」、「たまり場への送迎を実施する」です。

『支援が必要な人の把握・支援』は、「支援が必要な人が声を上げやすい環境づくりのために、常にその人と会って話をする」、「ひとり暮らし高齢者や障がい者など支援を必要とする人を把握する」、「地域の見守りなどを通じて、地域の問題の把握や解決方法の検討などに努める」、「支援サービスが必要な人を周囲で把握し、市や社会福祉協議会、民生委員等につなげる」です。

また、これらを実現するひとつの方法として、自治会ごとの防災訓練を実施するというのを考えました。旧下館市街地の自治会では、7回ほど防災訓練を実施しています。当初は1地区50人くらいの参加でしたが、現在は100人ほどが参加しています。防災訓練は地域全体の防災力を高めることができます。また、高齢者から子どもまで参加することで、地域世代間の交流を図ることができます。防災訓練を通じて周りの人たちと協力し助け合うことで共助の意識も芽生えます。自分たちのまちは自分たちで守る共助の意識を醸成し、安心して安全な生活を守ることにつながる、といった話し合いをしました。



下館地区A「福祉意識を醸成する仕組みづくり」の課題（第1回結果）

子どもたちと一部の地域の方々であればイベントはあるがメンバーが少なく、組織が縮小している。



中心人物や地域福祉リーダーが不足している。



全体・自治会など大きな単位での交流は調整が難しい。



できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

地域の交流		重要シール：4つ
出前講座の活用。 自治会単位での利用。		若い人にはSNSが一番でしょうが年齢を問わずというならクチコミが一番です。身近なところから声をかけてもらって友人から友人へ散歩中に出逢った人に声をかけたり、それもOKですと。まずは、その設定を誰もがわかっていることが大切だと思います。
常にご近所の人と仲良くし、話などを聞いてあげる。		
声かけ運動。会ったらあいさつ etc.		
世代間（若い世代）の交流		重要シール：1つ
子育て中の方も参加できるような世代を超えて集まれるサロン等を開催する。		若い人が地域活動に参加しやすい環境づくりに努める。
居場所づくり		重要シール：4つ
気軽に集まれるスペースを提供する（公民館）。		公民館を活用して話をしたりお茶を飲んだりするたまり場のようなものはないか。
地域の人が気軽に集まれるイベント等を企画する。		たまり場の送迎もできたらやりたい。

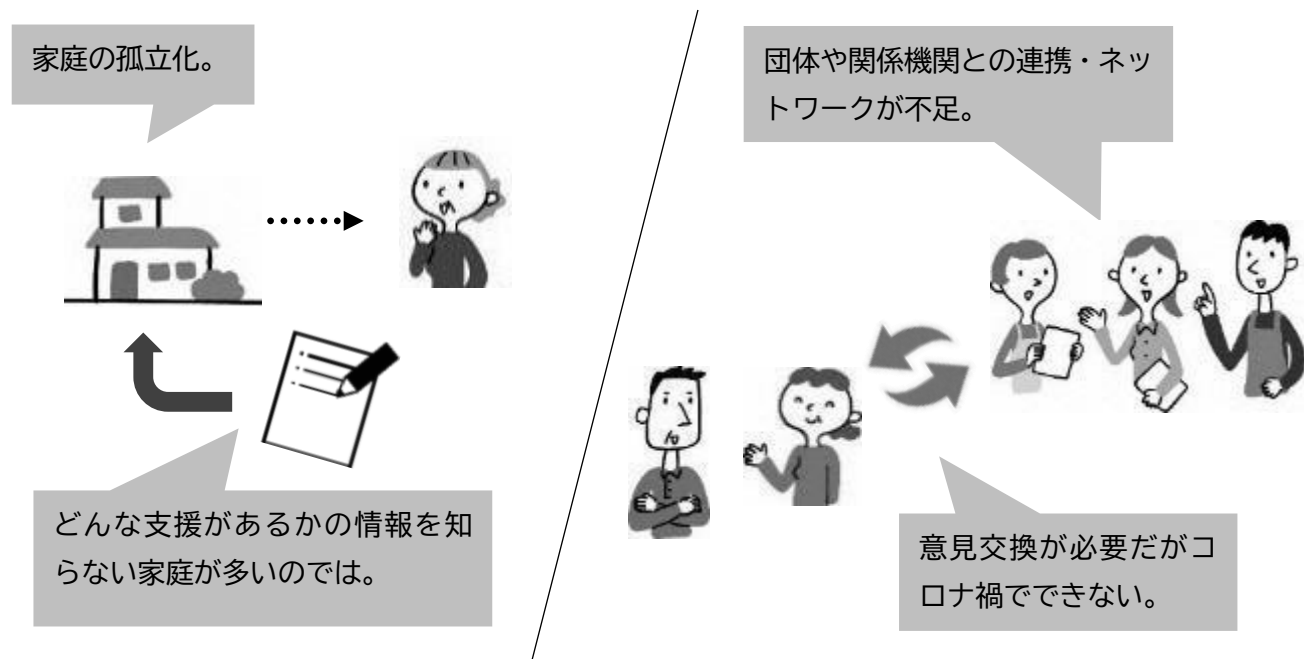
グループ活動には、年齢・性別関係なく集まれる場所の提供が必要です。コロナ禍の中ですから環境の良い（緑ある）戸外にテーブルやイスを出して気軽に話しやお茶の飲めるようなゆっくりできるフリーな場所があるとよいと思います。

そのほか

コロナ禍で諸活動が停止していますので、人と接する機会もなく情報を得ることができません。

今はコロナ禍の大変な時でめまぐるしく状況が変化しているため、自分のところでどうぞとは言えない所ですが社会情勢が変わり落ち着けばできることもあるかも知れません。

下館地区A「地域活動を促進する体制づくり」の課題（第1回結果）



できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

ボランティア・地域活動

重要シール：2つ

ノーゴミデイ（クリーン作戦）の活用。最初数人の参加だったが、今は40～50名参加がある。皆でやればすぐ終わる。それには、常日頃参加を意識して声かけする。参加者同士は初めて会話して、仲良くなったケースあり。

ボランティアが必要な人と、活動を希望する人とのマッチングを行う。

ボランティア情報を積極的に周知する。

コロナ禍のなか大変難しいですね。

会合や連携

市民の会との協議も必要。

コロナ禍でも会合必要。工夫してやるべきだ。

支援が必要な人の把握・支援 重要シール：1つ

どんな支援があるか、わかりやすい情報発信が必要。

支援やサービスが必要な人を周囲で把握し、市や社協、民生委員等関係機関につなげる。

支援が必要な人が声を上げることができる関係をつくるには、常にその人と会って話しをしたりすることかな。

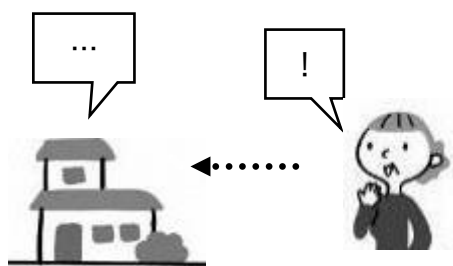
気軽に相談できる場所をつくる。福祉相談室の周知。

ウェブの利用

Z o o mやウェブの利用が難しくて他の人とつながれないと考える人は少なくないでしょう。その辺を手助けしてもらえる仕組みをつくり提供するのもいいと思います。

コロナワクチンの予約がインターネットやL I N Eで取るのが難しい方々に、中高生がボランティアを行いスムーズに取ることができた等の話題がありました。世代間交流につながります。そういった得意な分野を生かした世代と世代をつなぐ交流が生まれるとよいと思います。

下館地区A「安心して暮らせる環境づくり」の課題（第1回結果）



個人情報の問題があり、支援やサービスを必要とする人の掘り起しが難しい。



移動スーパーが発足した。
買い物代行には至っていない。



成年後見制度が普及していない。

できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

支援が必要な人の把握

重要シール：3つ

ひとり暮らし高齢者、障がい者など支援を必要とする人を把握する。

地域の見守りなどを通じて、地域の問題の把握や解決方法の検討などに努める。

自治会組織で常日頃地域の方の把握必要。支援者は市関係機関等の協力を得て解決した。

日常生活の中で困った人がいたら手を差し伸べ自分にできるようだったら手助けをするよう心がける。

支援やサービスを必要とする人の掘り起しは相手側の理解や現況への共感が重要。

一方的にならないような行政からの支援も必要。

防犯・防災

すべての世帯に防犯や防災に関する情報が行き渡るようにする。

災害時の避難場所、避難ルートを確認する等、日頃から災害時の対応を準備する。

防災訓練を6～7回実施、参加者は100名以上に及んでいます。なにより指導者が大切ですね。

制度・サービスなどの情報共有

“私はこんな時ちょっと困った”という情報をたくさん集め力を貸してくれる人を募ってどんな小さな困り事でもなるべく対応する努力が必要だと思っています。

例えば、コロナのワクチン接種、2回目は何かと副反応が出るということで、いざとなった時困らないよう、飲み物や簡単に食べられるシリアルや飲用ゼリーレトルト品など買い置きした人も多くいました。でも準備できず困った人はいなかったのでしょうか？がまんしたのでしょうか？これからブースター接種も進むはず。不安な人はいると思います。正しく、きめ細やかであたたか味のある情報や手助けがあると安心な暮らしにつながると思います。

福祉のサービス、成年後見制度などの制度を勉強したいです。

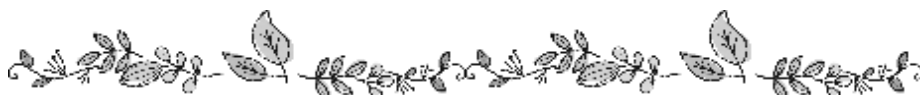
8月より移動スーパーが始まりました。そこまで行けない人もいます。買い物代行をやれたらいいですね。

重点プロジェクト

地域・世代間の交流～あいさつからはじめよう～

内容

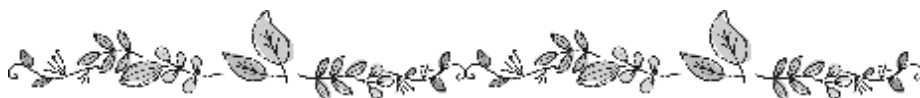
- 声かけ運動、会ったらあいさつ。
- 常にご近所の人と仲良くし、話などを聞いてあげる。
- 出前講座の活用、自治会単位での利用。
- 若い人が地域活動に参加しやすい環境づくりに努める。



気軽に集まれる交流の場づくり

内容

- 気軽に集まれるスペースを提供する(公民館を活用)。
- 地域の人が気軽に集まれるイベント等を企画する。
- たまり場の送迎もできたらやりたい。



支援が必要な人の把握・支援

内容

- 支援が必要な人が声を上げることができる関係をつくるには、常にその人と会って話をしたりすること。
- ひとり暮らし高齢者、障がい者など支援を必要とする人を把握する。
- 地域の見守りなどを通じて、地域の問題の把握や解決方法の検討などに努める。
- 支援やサービスが必要な人を周囲で把握し、市や社会福祉協議会、民生委員等関係機関につなげる。

2. 下館地区B

総括（第4回の発表内容）

第1回では、課題として、『福祉意識を醸成する仕組みづくり』では、「公民館活動では色々な行事が催されているが、各児童館においては活動内容が非常に少ないということで、さらにその活動を広げていったらいいのではないか」、「そのためにはいろいろな補助を出すことによって運営がしやすくなるのではないか」。『地域活動を促進する体制づくり』では、まずボランティアの活動がいろいろあるが、その活動を担ってくれる人が少ないということで、多少でも補助があればもう少し活動する人が増えてくるのではないか。『安心して暮らせる環境づくり』としては、「広報などが届けられてない人の情報不足」、「特に独居の高齢者は福祉サービスの情報入手が非常に困難になっている」というような意見でまとまりました。

それに対して、第2回であがった解決アイデアを踏まえ、最終的に第3回で決めたことは、まず重点プロジェクトのタイトルとして、「情報の共有と課題(地域の交流、関係団体・機関の連携)」ということを受けています。その中では、いろいろな団体や協議会が多数ありますが、それらの方々が交流をして情報の共有ができるよう、気軽に交流できる機会を設けるということがあります。

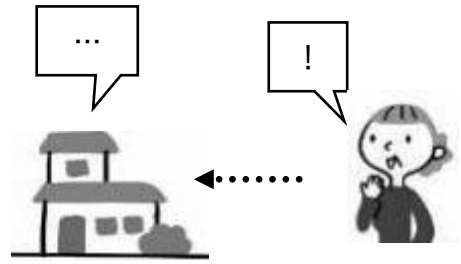
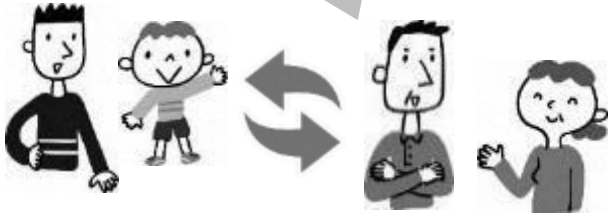
2つめは、「ボランティア活動への支援」です。ボランティア活動に対して、旧下館市の頃に多少の報酬付きでやっていた時期があったのが、筑西市になってからはそういった補助がゼロになったと思うという意見がありました。少しでも補助があれば、もう少しボランティアをやっていただけの方が増えてくるのではないかという意見です。

3つめは「生きる喜びの場を提供する」ということで、まず支援やサービスを必要とする人の掘り起こしをするために、民生委員の訪問がもう少し活発にすること、地域包括支援事業の活動において情報交換は有意義だという意見でまとまっています。



下館地区B「福祉意識を醸成する仕組みづくり」の課題（第1回結果）

若い世代が少ないため、触れ合う機会がない。



児童館はあまり活発ではない。

手を差し伸べても相手になってももらえない。

公民館やサークル活動は活発。

指導者・教育者が不可欠だが、地元にはいない。

できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

支援が必要な人の把握

民生委員が積極的に支援を要する家庭と交流する。

まずは関係する団体が情報の共用をして活動を進める。

支援を必要する方々には、（ひとり暮らし高齢者、高齢者夫婦、障がい者家族）先ず何を望んでいるのか聞くのが最初です。そこがスタートです。じっくり聞いて上げて下さい。

福祉意識

一人は皆の為に！！皆は一人の為に！！と云う意識が薄く成っている。“自分さえ良ければいい”の意識が強い。

地域福祉を捉えるには。※自分のこととして、強く自覚する、させるしかない。

近所迷惑<猫の多頭飼><樹木、雑草手入なし>等の家があり。その事でお互いの遮りができている。

グループ・地域活動の継続 重要シール：3つ

グループ活動を続けるには。
※ある程度の補助、助成金をする。※リーダーを増やす。

リーダーを増やすには、なりたくないのはなぜか。
※地域福祉という課題が難しい。自覚・体力がない。

いろんな会の人たちと普段から交流して情報を交換することが最も大切なことのように思う。

地域の交流

各自治会へ照会や援助を行い、活動を進めてもらう。

小さくは地区の集会場利用の中で、医療の話し、軽い体操等々一時間前後→会話が生まれます。普段のストレス肩の重みも少し和らぎます。

映画会などをやって終わってから感想を発表する。観た人全員から意見を聞くことを最初に言っておいて必ず聞く。

最近は各自家から出て来ない。話をする機会も少なくなり縁遠くなっている。

鬼怒川ピクニックなどを計画して新しくなった遊歩道を歩く。途中の休憩所でクッキーやバナナを配る。飲み物は各自持参。

住んでいる地域（100戸位）には集会所がない。1回/月の公園草刈を利用してコミュニケーションを持つようにしている<但しコロナで中断><全面的ではないが>。

交流の拡大には、老若男女が共に一同に会する機会を多くつくる事が重要です。無料で参加できる交流機会を。費用は市に願う。又は寄附を募る。

児童館の活用

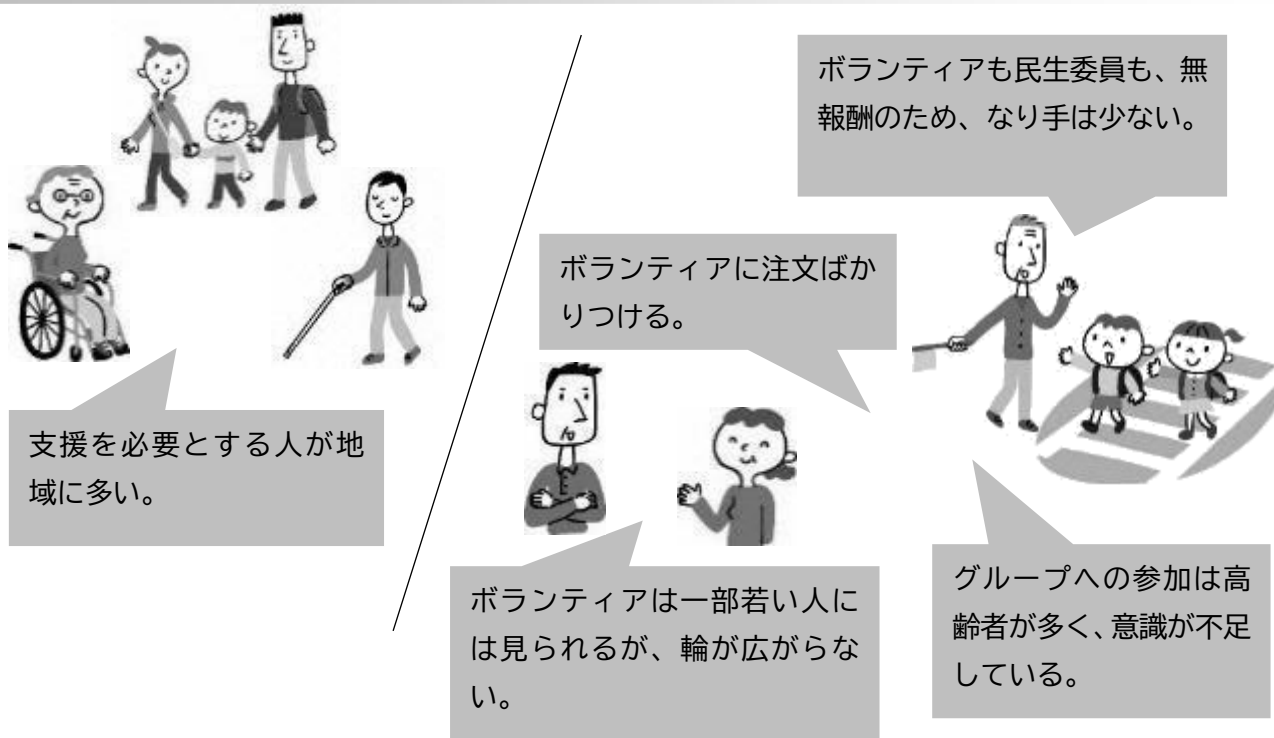
近所にある児童館の活性の方がこれからは、必要。

児童館の調理室を利用して子どもたちに簡単な和食（きんぴら、豚汁、野菜の煮物）などを教えながら交流をして一緒に食べる。（女性会、自治会の協力が必要）

子どもたちが少ない為最近では児童館の利用がほとんどない様なので交流の場として地域の人たちが利用し活動できればと思うが、高齢者世代が多いとなかなか難しい。

児童館又は公民館で子どもと高齢者が一緒に折り紙やお手玉輪投げをする。グループをつくり何回か同じメンバーで活動する（交流する）。

下館地区B「地域活動を促進する体制づくり」の課題（第1回結果）



できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

支援が必要な人の把握・支援

重要シール：5つ

言葉では、定期的に支援が必要な人への巡回をと言われますが、私は一歩踏み込んで、月に2回実施すると、規約又は市の条約等で義務づける必要あり。

川島支部自治委員会主催で、年4回程度、団体間連携会議を（現在、体育祭開催前、社協年間事業確認時）。福祉事業所との交流は民生委員だけで知りがたい事多々あります。

支援を必要とする人には民生委員、市の保健福祉部の協力も必要。

支援を必要とする関係をつくるには。
※本当に必要なのか、どの位必要なのか、実態を熟知して関係をする。

信頼関係づくり

児童館にしても公民館にしても、そこに行けば必ず誰かがいて、1時間2時間の子守りをしてくれる。そんな場所が必要。

常々、フランクに言葉が交わせる雰囲気が必要。＜自分ではそうしているつもり＞でも、相手が喋ってこない。ジレンマを感じている。

ボランティア活動 重要シール：4つ

ボランティアも有償化を考えていかなければいけないと思います。わずかのお金で構わないからチケット制、ポイント制にして、月々のお小遣い程度にでもなれば主婦だって空いた時間にやると思う。

ボランティアの活動や内容を多くの人たちにまず理解して頂くことによって時間的にゆとりのある方でこれだったら協力できるという人も居るのではないのでしょうか。

ボランティアについては仲間意識を広げる事が大事と思うが、なかなか、そこまで行きつかない。

基本的には「コロナの収束」を待つべきと思う。中途半端な活動は混乱し、収束を長引かせるだけ。活動は最小限であるべき。

関係団体・機関の連携

重要シール：5つ

色々な会合に出席し、活動の報告や話し合いなどをした方がよい。各団体との意見交換が必要。

各種団体に参加してる層と、そうでない層との認識の差＜社会に対する＞が、ありすぎるのではないか。社会が便利すぎて、他人の力を借りなくても生活できる現代の負の影響かも？

コロナ禍でもボランティアやNPOが活動を維持するためには→難しいのではないか。

コロナ禍の活動について。
※国・自治体の方針の中で活動するには、難しいのでは。

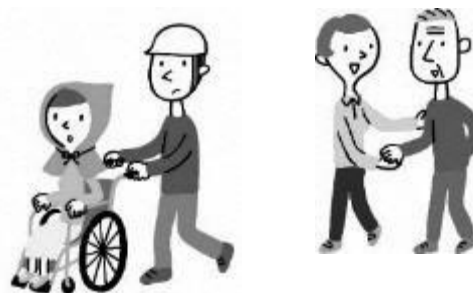
下館地区B「安心して暮らせる環境づくり」の課題（第1回結果）

自治会への未加入の方は広報が配布されず、情報不足。特に独居高齢者が多い。



独居高齢者で福祉サービス情報を入手することが困難な人もいます。

災害時の助け合いのために、普段の声かけが必要。



防災体制はできているが、訓練はできていない。

できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

受けられる支援の周知	
支援を気づかせるには。 ※市報等のお知らせ、数多くの周知しかないか。	重要シール：1つ 支援を受ける人が「自分は支援が必要だ」と気づくには→お知らせ、周知しかないか。
自分の家族構成で関わる情報は知りたいだろう。	「積極的に情報を入手する。」は万人全員できていると思う。私は市のホームページから入手には、疑問を持っています。市民の何%の人が活用しているか？
支援が必要な人の把握・支援	
支援を必要とする人の掘り起しを言うより、その様な人の情報を持ったら、民生委員と協力して観察を忘れない事が大切。	掘り起こし。※民生委員は訪問できる立場・役割、権限もあるので日常生活を良く観察する。
地域内の各家族構成等はわかっているから助け合いのために普段からの見守りや声かけは必要だと思います。特に高齢者の人とは顔を覚えてもらう事も必要な気がします。	

防犯・防災

災害時の助け合いのために普段からの声かけや、いろんなイベントに誘うとか、地域の活性化が必要だと思う。

地域全体で防犯や防災に取り組むためには→防犯カメラでかなり抑制できる。防犯カメラを増やし、設置の周知で。

防犯、防災への意識は薄いです。テレビ、新聞報道主体です。近所間の普段での声かけ大切だと思います。人の身を心配して上げるように心掛けています。

防犯等の取り組み。※防犯カメラの増設、設置している周知がない。抑制できるのでは。

地域の家族マップを、（プライバシーの問題はあるが…）行政の方であらかじめつくっておいて災害に備えた方が良くと思う。地域地域で災害時の避難場所をいつも確認して、準備しておく。家族ごとに落ち合う場所を決めておく。若い人が多い地区は、それぞれに係をあらかじめ決めておく（配送係や力仕事など）。

地域防災。1. 自分の住んでいる地域で発生し得る災害について認識させる。2. その事について制御する。減災させる方法を身につける。3. 繰り返し訓練が必要。※訓練させる側の組織づくりも必要。…なかなか困難だが。4. 地域内での教室が必要。5. 「自助、共助、公助」の言葉に踊らされる事なく、リーダー教育や、育成訓練の継続実施が必要。☆被災者の受入体制は常に万全でなくてはならない。現状では救急車での待ち時間が長すぎるのでは？

買い物支援

買い物代行に近い移動スーパー4週目終了。安定した買い物人数です。そこにコミュニケーションも生まれています。感謝している高齢者も居り、継続を希望しています。

成年後見制度

成年後見人制度とは？そのものが判らない。（勉強不足…反省）。

重点プロジェクト

情報の共有と課題（地域の交流、関係団体・機関の連携）

内容

- ふれあう機会を持つには。※誰もが気軽に参加できるイベント行事を開く。
- 各協議会、連絡会等との接点がなく活動内容が理解できていないので、まずは合同の意見交換が必要。
- 関係団体が連携するためには→気楽に参加できる交流会を開く。
- 各自治会で子どもたちと高齢者などが集える事業を助成できるようにする。



生きる喜びの場を提供する

内容

- 支援やサービスを必要とする人の掘り起しをするためには→民生委員は訪問できる立場にあるので日常生活を観察する。
- 地域包括支援事業の活動において、情報交換は有意義だと思う。
- 支援が必要な人が声を上げることができるような関係→本当に必要なのか。実態をよく把握する。
- 支援を必要とする高齢者のひとり暮らしの方等には地区の民生委員や関係団体の方が定期的に見まわり訪問などが必要かなと思います。
- 自治会未加入者(独居・外国人等)に対する広報等の配布状況を自治会長や民生委員に知らせ行動に結びつける。



ボランティア活動への支援

内容

- ボランティアに参加してもらうには。※必要最小限の助成をする(交通費、宿泊費位)。
- 高齢者がボランティアをすると身体が元気になって生きがい得られ生きていくのが前向きになります。誰かの役に立っているという意識が心身共に良い作用をして、健康になるし、筋肉がつくし丈夫な高齢者が出現すると思います。
- ボランティアは多種多様です。奉仕の精神は重要ですが、報酬付きを願いません。声かけもできやすく、協力姿勢の方もいると思います。

3. 関城地区

総括（第4回の発表内容）

私の地域は大体半分が農業、半分が勤めに行っている人というところですが、農家の人に言わせると今忙しくてそれどころではない状況です。また、集まる機会をつくるにしても、日中は仕事がある人は時間が取れず、夜は家事をやっている人が忙しくて参加できない。そのようなことでいろいろ問題があるなと思いますが、『ボランティア活動の活性化と連携』を重点プロジェクトの一つとしました。

もう一つの重点プロジェクトは、『子どもの頃からの福祉意識の醸成』です。内容として「福祉を学ぶ機会をつくる」ということですが、福祉は非常に幅が広くて、なかなか難しい問題があると思います。集落の細かいところではある程度できると思いますが、それでもいろいろと問題があります。また、「親子で参加できる交流の仕組みをつくる」ですが、今子どもは皆、部活などに行ってしまう、休みなどは家にいません。親子のボランティア活動も、親子でできるうちはいいですが、100%できるという考えはないからできないところもあると思います。農村地帯になるほどできないです。

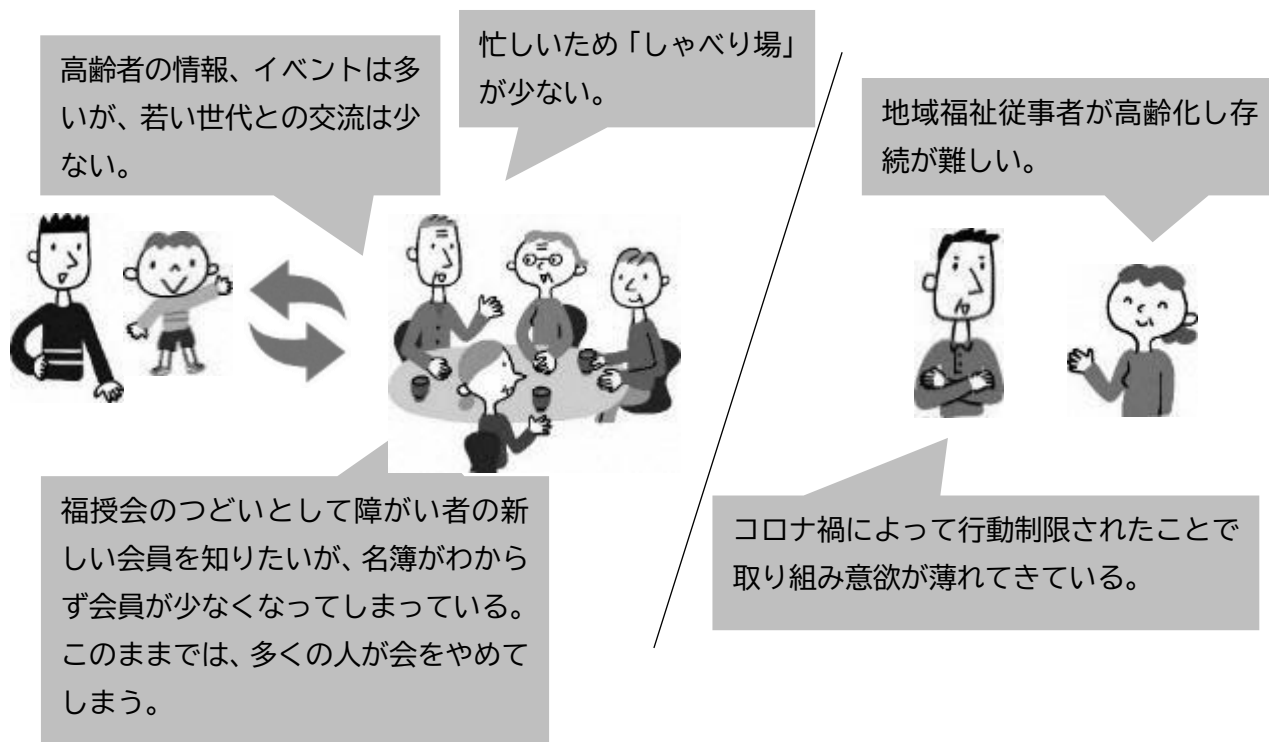
重点プロジェクトではないですが、できる限り集落で集まって色々お茶を飲んだりお菓子を食べたり、そういう場をつくりたいと思っています。集落によっては班があります。班の中で隣近所仲良くやっていけばいいことがあるのではないのでしょうか。「旦那が帰ってくるまで車がない、子どもが熱出てしまった」と言えば車を貸してくれるような隣接関係が一番大事です。皆仲良くやるのが一番いい方法ではないかと思います。

また、一番困るのは災害です。台風が近づいているようなときに、ひとり暮らし高齢者の家へ行って声をかけると、入ってお茶でも飲んで、と仲良くなります。

やはり何度も言いますが、隣近所が一番大事だと思います。



関城地区「福祉意識を醸成する仕組みづくり」の課題（第1回結果）



できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

福祉意識の醸成 重要シール：3つ

核家族が増加しているので幼稚園内で園児と地域の高齢者がふれあう行事は園児にとっては貴重な体験になるのでコロナが終息したら継続してほしい。

「地域福祉とは何ぞや」というようなチラシやパンフレットを全世帯に配布する。

小学校の中・高学年の児童が社協職員の指導のもとに、白杖等を使って視覚障がい者の模擬体験をするのは“思いやる心”が育ってボランティア精神の育成にもなる。

交流の場としては老人や子どもたちを考えると地域の田園都市センターが良いと思う。自分の足で出かけられると飽きたときには家に戻ることもできる。

地域福祉リーダーやボランティア参加者を増やすには、子どもの頃から、JRCの精神を学ぶ機会を多くすること。

親子で参加できる交流する仕組みをつくる。

福祉の担い手・リーダー育成 重要シール：3つ

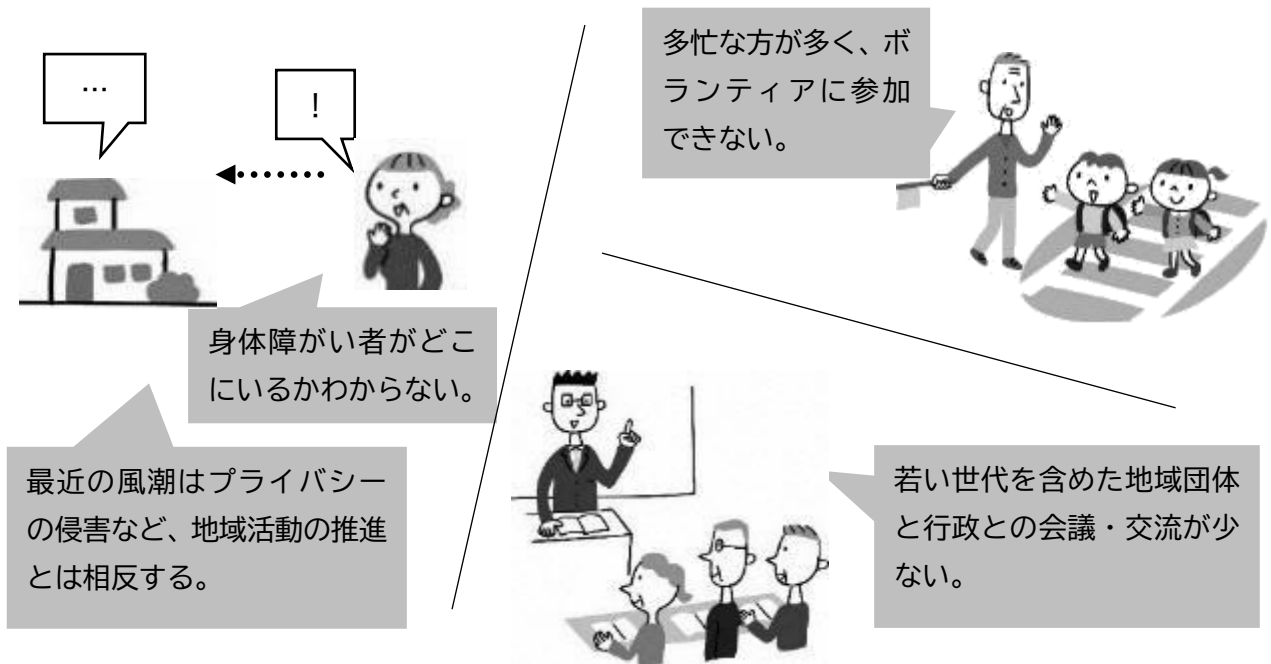
相談できる環境づくり

活気あるグループには、優秀なリーダーがいます。研修や実践を重ねて、リーダーの育成をすると良いと思う。

障がい者の方は内にこもりがちです。心開いて相談できる環境が必要では。

集落のリーダー的な立場の人の意識の向上と地区担当の福祉関係者との緊密な情報交換をする。

関城地区「地域活動を促進する体制づくり」の課題（第1回結果）



できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

ボランティア・地域活動の活性化 重要シール：4つ

休日を利用して親子で楽しく参加できるボランティア活動を考えてみる。

役目意識にとらわれず、相手目線で考え歩み寄ることで、友達感覚で行動できればいいのではと思います。

自治会と民生委員の連携強化を図るため、新たに連携会議や情報共有の仕組みをつくる。

関係団体・機関の連携

SNSの掲示板を立ち上げ、自由に意見交換できる場をつくる。スマホなら幅広く持っていると思う。ちっくんが情報の発信役となり、皆が読んでくれるようなものを提供する。その中で地域福祉の役割を伝える。あまり見てくれないかな！

数年前までは高齢者を招待と銘打って中間世代との交流が20年近く続いていたが、高齢化に伴いやめてしまいました。そんなものもかつてはありました。

青少年育成団体、学校、文化協議会、高齢者クラブ、民生委員児童委員、青年会議所、女性会、障がい者、自治会等、多くの団体が主催、参加して文化祭と体育祭を開催する。

関城地区「安心して暮らせる環境づくり」の課題（第1回結果）



宅配事業者を利用するので買い物代行の依頼は少ない。

町全体は防犯意識が向上している。子どもを守ろうという地域の努力が感じられる。



公民館等が関本地区しかないのので遠いため老人は行けない。

できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

見守り

重要シール：3つ

行政が住民異動届出等で把握したひとり暮らし高齢者などの情報を民生委員等に提供する仕組みをつくる。

「いつ、だれが、どういう場合にどのような支援を行うのか。」について平常時から市民に周知する。

日々の生活が最低限守られるよう、見守り隊の育成（ひとり暮らし、ひとり親等）。

ひとり暮らし家庭が多く、話し相手を必要としている。訪問をしておしゃべりの相手になるボランティアがいればと思う。

防犯・防災
災害時の助け合い

重要シール：2つ

通学路や庭先などで児童・生徒たちの登下校時の見守り、声かけは積極的に続行したい。

避難支援関係者（災害時地域リーダー等）が協力して、個別計画の作成を早急に進める。

最近不審者らしき車を見かけます。情報を共有して注意することが必要ではないかと思う。

災害の支援を実施するためには、自治会の班編成が一番身近な地域であり、情報を共有できたら良いので、会話を大事に密にする。

そのほか

最近移動マーケットが来るようになりいいことだと思うが、利用度等の調査報告がわかれば…。

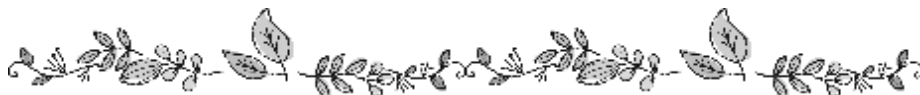
隣近所との交流を深めようと「手作りしたので食べてください」とおすそ分けしている。よかれと思ってしているこの行為の判断は？良しか否か？

重点プロジェクト

子どもの頃からの福祉意識の醸成

内容

- 福祉を学ぶ機会をつくる。
- 親子で参加する交流の仕組みをつくる。



ボランティア活動の活性化と連携

内容

- 親子でできるボランティア活動を考える。
- ボランティアリーダーの育成。

4. 明野地区

総括（第4回の発表内容）

第1回では、地域世代間のつながりが少なくなっているといった課題が出てきました。

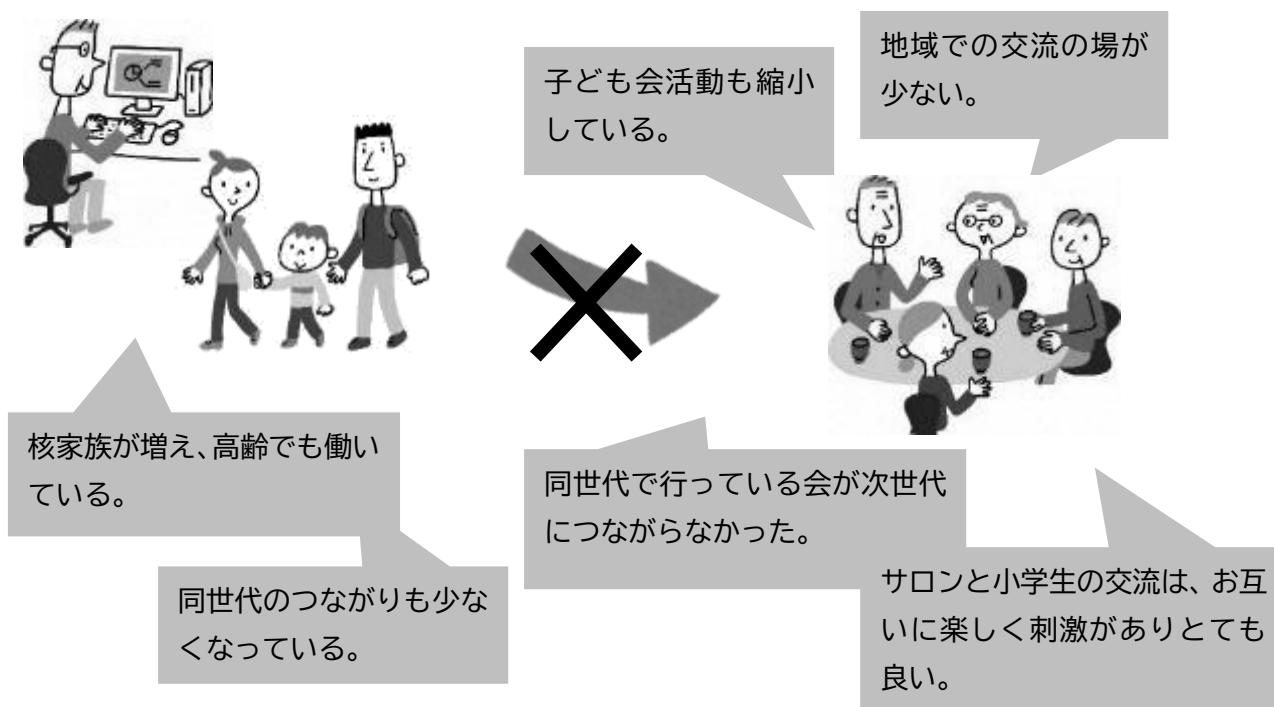
この課題に対する解決のアイデアとしては、「自治会や子ども会、女性会、いろいろな間でつながりをつくってイベントを開催し、急速に皆に参加してもらおうようにしていく」という意見が出ました。それには、各団体をまとめてくれる方が必要になってくるので、スキルを持ったリーダーの育成も必要になってくるのではないかと考えています。

重点プロジェクトは、『みんなで集まって楽しもう』です。皆が参加することで世代間のつながりを強め、自然にボランティア精神や共助の精神が育つのではないかと考えています。

明野地区では、さまざまな団体が5種類くらいあるということで、そのリーダー同士が話し合える横のつながりをさらに持てるようになれば、いろいろな世代間でのつながりも持てるのではないかと考えてみました。また、自治会長さんなどが地域のことをよく把握しているということですので、各団体の会長さんと自治会長さん、子ども会等が横のつながりを持って、その方々を中心に何か馴染みやすく気軽に参加できるお祭りや盆踊り、お茶会などがさらにできれば、明野地区ももう少し活性化していくのかなといった話し合いをしました。



明野地区「福祉意識を醸成する仕組みづくり」の課題（第1回結果）



できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

地域のつながりづくり		重要シール：3つ
人と人とのつながりを築き、参加する楽しさを見つけてもらう。	コロナ禍でもできることを考えなければならない。	
人と人が助け合う共同関係で人は充実感を得る事ができると思う。	社会には様々な人がいる、それぞれで生きていくのがうまくいかないときは助けあう。	
働いている人たちとの交流の場をつくれな。どうしたら良いか？	茶話会をするたまり場が必要。	

生活格差がある地域では、なかなか働きかけができない？

グループ活動の活性化

重要シール：1つ

各地域にある「集落センター」を有効活用し、同じ趣味を持つ交流の場や、「お茶のみ」場所など肩のこらない居場所となれると素晴らしいと考えます。

趣味のグループを続けるためには趣味を同じくする方々でまとまっている。フラダンスやカラオケ、編み物等

活気のあるグループは、グループの目的とリーダーとメンバーの目的意識が同じである事が必要。

アイデア、疑問、考え方とか年代が片寄らない方が活気のあるグループにつながるのではないかと思う。

趣味のグループを各公民館で簡単に集まれる仕組みをつくる？とか？

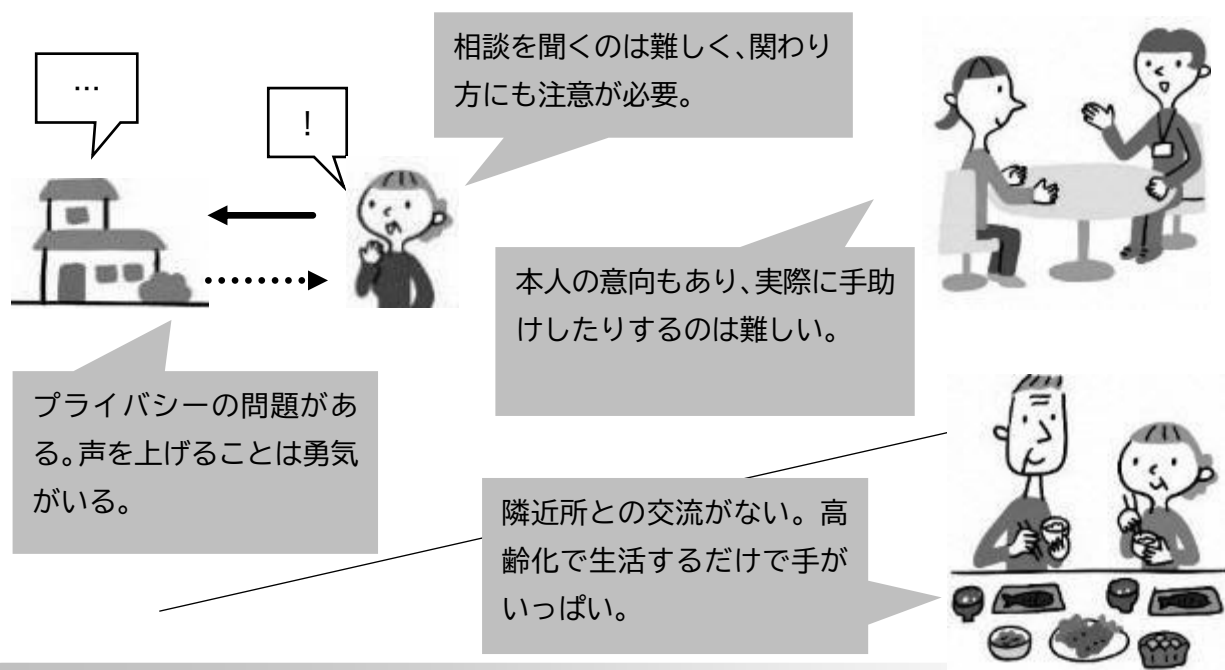
各組織の連携がないと進めないと思う。

リーダーの育成

リーダーの責任感が必要なのでその素質を持ち合わせる人を育てる。

自分から進んでリーダーをやってみたいと思えないと、責任ばかりが重く感じられてしまうのではないかと思う。

明野地区「地域活動を促進する体制づくり」の課題（第1回結果）



できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

支援が必要な人の把握

支援を必要としている人を掘り起こす組織づくりが現在「コロナ」のため休止状態になっています。骨子をつくる本当の最初のところです。

近所付き合いのなかでたくさん情報交換できることが大切。

支援が必要な方への対応が地区別で取り組めれば、進むのでは？

本当に困っている人にはすぐできる支え合いが必要。

気軽に安心して話せる、話し合いができる、そういう関係が築きあげられる場所が大切。

イベントや隣近所との付き合いを多くすると「話題」の中にたくさんの情報交換もできる。

近所付き合いの中で沢山の話題に触れる事が大切と思う。

<p>関係団体の連携</p>	<p>重要シール：1つ</p>
<p>各団体との連携はとても大切と思う。</p>	<p>関係団体も地区別でのメンバー同志の顔合わせと情報交換が必要なのでは？</p>
<p>関係団体が連携するには、新たな同じ方向にむける「こと」が必要ではないか？</p>	
<p>信頼関係づくり 重要シール：1つ</p>	<p>気軽に参加する工夫 重要シール：1つ</p>
<p>体験や物の見方が同じように感じそれに反応してみようと思いや相手を共通する何かを感じ取る能力が必要だと思う。</p>	<p>実体験やボランティアの内容（目標）を知らせたり、うれしかったとか楽しいこと等を「サラッと」PRする。ボランティアを間違って受け止めている人もいらっしゃると思う。</p>
<p>個人個人考え方、受け取り方も全く違います。「プライバシー」という言葉でシャットアウトされることも多い。「消費者トラブル」のチラシを持ちながら同世代と話の糸口がいくつかできました。</p>	

明野地区「安心して暮らせる環境づくり」の課題（第1回結果）



できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

支援が必要な人がつながるために

重要シール：1つ

制度というと、とても難しく思ってしまう。でも、こんな時はここのドアをたたけばいいんだよと教えてもらえれば心配しなくて済むと思う。一覧表みたいに頭に入りやすいのがあればいいと思う。わかりやすいのは絵が多い方がいいと思う。

差し迫って支援が必要な人が声をあげられないことが多い。訪問時、情報収集につなげて行きたいと考えます。

普段は家族の介護を受けながら家庭で生活している高齢者が家族の都合により家庭で生活する事ができなくなった場合。

困った時にドアをたたいた向こうには光があれば安心できる（ドラえもんのようにどこでもドア、なんでもドアがあって暮らしやすい世の中になればいいなと思う）。

本人、もしくは家族、あるいは知人に介護が必要になった時→まず、どこに、だれに、相談すればいいのか。

サービス・制度の周知

重要シール：1つ

サービスや福祉の制度を知ることによって安心につながる。

運転をやめた時等→日常生活する上で受けられるサービスは。

お茶飲み話の中にも「市のサービス」をおりませながら伝える。

サービスや福祉の制度を若い人だったらSNSを利用して調べたりできるが、SNSを使えない方たちにどうやっていいか思いつかない…。
→わかりやすい紙媒体を回覧板で配る？など…。

支援が必要な人の把握

防犯・防災

ボランティア活動で70才ひとり暮らしの人に宅配弁当を進めている。

防犯カメラの設置を自治会で必要とする所には補助をする。

誰が何人で暮らしているかは把握していてもいいと思う。

市の防災無線は内容が聞き取りにくい。

最低限の情報を把握しておく、緊急時に便利だと思う。

自治会長と民生委員の情報の共有を図るとともに、支援が必要な世帯を洗い出す事も必要では？

人にはそれぞれプライバシー権があるのでなかなか支援やサービスを必要としているのか難しい。

連携体制の構築

地域で1つの事を成し遂げる時は、中心になって周りをかため、引っ張ってくれる方と組織づくりが必要。

そのほか

成年後見制度については、難しくわかりません。

のり愛くんの利用方法を再度考えていただきたい。

重点プロジェクト

みんなで集まって楽しもう

内容

- 行事、おしゃべり、お茶会等。
- 世代間の壁を打破。

5. 協和地区

総括（第4回の発表内容）

第1回では、「福祉に関する意識が全くなく市民がコミュニケーションを取る方法を知らない」、「困った時の助け合いの意識が薄く交流が少ないため、若い人たちとの交流も少ない」、「ボランティアの意識がないと感じる」というような課題が多くあげられました。

第2回では、「地域活動の関係機関の連携が必要」、「世代間交流ができるイベントを継続的に行えるよう自治会が中心にできると良いのでは」という意見があがり、「住民同士の見守りができる環境をつくり、若い世代が安心して地域で育てられるようにしたい」という解決のアイデアが出てきました。

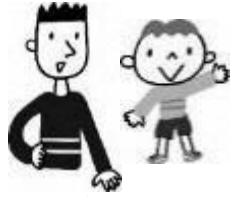
第3回では、これらの解決のアイデアから、『福祉意識の醸成』、『関係団体・機関の連携』、『住民同士の見守り』の3点を重点プロジェクトとしました。

これらの重点プロジェクトについては、まず『福祉意識の醸成』では、ボランティア・福祉対象者の名簿を作成し、支援が必要な人の把握ができると良いと思います。教育の充実、小さい頃からボランティアへの興味関心を持ってもらうような取り組みを行いたいです。『関係団体・機関の連携』では、支所機能の充実、地域関係団体の意見交換やリーダー的活動ができる方の育成を行うという意見になりました。『住民同士の見守り』では、地域の活動が見えるイベントの開催、自治会を中心に三世代交流イベントを継続的に行えることが必要といった話し合いをしました。



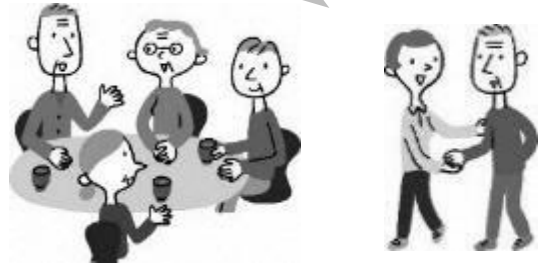
協和地区「福祉意識を醸成する仕組みづくり」の課題（第1回結果）

イベントがあっても若い人は参加しない、交流が少ない。



福祉に関する意識が全くない。

困ったときの助け合いの意識が薄く、交流が希薄。



コロナ禍で参加することができていない。

できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

福祉意識の醸成

関心のない人が「地域福祉」を自分のこととして捉えるためには？
→かなり難しい問題だと思うが、月並みだが行政が福祉に対する理解を求めること。次に実感してもらうこと。多くの福祉活動に参加してもらうこと。福祉の仲間をつくってもらうこと。だと思う。

地域福祉に対するアンケートをとって意識づけをすることはどうだろうか。

施設慰問。子育て支援。ふれあい訪問。グランドゴルフ等。体を動かす。

身近な話から信頼関係をつくることが大事。

地域の子どもや若者が障がい者や高齢の方々とふれあう機会を持つためには？→地域でのコミュニティは、合併後著しく低下してきており、行政の担う責任は重い。地域に密着してきた活動や、多くの福祉団体への活動支援などが縮小されたり、放棄されたりしてきた。また、家庭や教育の場においても高齢者や障がい者に対する理解を求める機会の激減があり、これらを回復することが重要である。ほとんどの子どもや若者は福祉を知らない。基本的には、教育の場において理解を求めることが重要でありこれを家庭につなげていくことではないか。

現在は元気だがこのまま最後まで誰の世話にもならないで生きられるだろうか。

地域が交流するためのイベントなどがあると良い。

世代間交流

どんなことだったら地域の人と話せる？→普段高齢者同士の会話は多少残されているが、勤務者や青少年との会話はほとんどない。以前は集落に老人クラブ、ゲートボール、ソフトクラブ、野球クラブ、バレーボールクラブ、盆踊り、運動会、子供会、結婚式等の会話の機会が多くあったが、皆消滅した。一番多く会話する機会のあった葬式でさえ、現コロナ禍では全くなくなった。今は、ゴミの出し方、集落での苦情、市に対する要望や選挙くらいのものだ。あまり話したがらない。

児童が少ない為空き教室があると思うので地域の伝統芸能など子どもたちに教えては。

親子で参加できる交流会があるのか。

三世代間の交流をイベントを通じ実施しているのでかなりのコミュニケーションが必要。

若い人の意識が薄い。子どもころからのふれあう機会を多く持つことが継続していくことにつながるのでは。

交流の場づくり

お互いの趣味や健康など。

重要シール：3つ

地域の仲間（三世代）が一同にできるイベントを緻密に継続する。内容は皆が参加して決める。

→自治会が中心で行う。

交流の場に活用できそうな施設や空きスペースはどこか？→交流は何処でもできるはずである。以前は「炉端会議」「井戸端談話」などという言葉があった。施設や空きスペースということでは、周りを見渡せば、地域の公民館、各地区の小学校の余裕教室だと思う。

団体活動の活性化

重要シール：2つ

環境活動ではリサイクル回収、一般のゴミの処理等全員が取り組んでいる。

趣味のグループも趣味を通してふれあいを生かしていく。

趣味のグループが活動を続けるためには？→よくわからないが、趣味活動の指導者発掘とリーダーの育成だと思う。

趣味の活動を続けるためにはお互いに思いやる気持ちが大切だと思う。

協力はできる。まずはここから。負担を軽くして徐々にな。

福祉の担い手・リーダーの育成

責任を持たせられる。

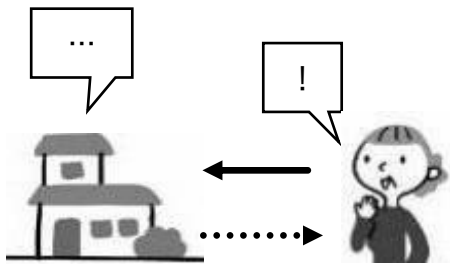
各年齢層の中から各リーダーを育成している。

現況は「地域福祉」の活動について、一部を除きすべて活躍していない。

活気のあるグループはどんなことができているだろうか？→福祉団体に限らず、リーダーとなる人のカリスマ性と求心力、そして補佐する人ではないか。その人たちがグループを起こし支えているのではないだろうか。

地域福祉リーダーを増やすには？なぜリーダーになりたくないのだろう？→団塊の世代以前は、親分肌とかボス的な人などとの話をよく聞いた。その後の世代の公平性、平等、差別などの社会活動のなかに一要因があるのではないか。また、私たちの世代を含めて群れること、特に団体行動を嫌う傾向がある。このような社会構造の中で多くのリーダーは生まれて来ない。今後の世代は益々リーダー不足となるだろう。福祉活動ではその機会や活動そのものを増やしていく必要がある。当然のごとく行政が発掘とその火付けを行う。

協和地区「地域活動を促進する体制づくり」の課題（第1回結果）



市民がコミュニケーション
をとりたがらない。またとる
方法を知らない。

ボランティアの認識がない。
それよりも趣味を楽しんで
いる傾向がある。



高齢者、働いているなど、地域
に参加できる人がいない。

できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

地域活動の活性化 重要シール：1つ

趣味の延長でも助け合いにつながることはないだろうか？→趣味を通して個人的な関係をつくり、その交流から助け合いが生じることがある。しかし、趣味の場が極端に減った。例えば、以前は高齢者団体や福祉団体を通して多くの趣味交流が生まれていたが半減してしまった。生涯教育や福祉行政の集約化がその一因となっている。これら団体への支援には直接行政が手助けを行っていたが、改めてその支援を復活させてはどうか。

働きながらも地域活動を手伝うきっかけはないだろうか？→働いている人は、働いていることを理由に地域活動を手伝わない言い訳としているのが現状である。地域活動についてはそれぞれ持ち回りとか、当番制としている事がほとんどある。このような中で、多くの人にその人のできる活動からできる人のみにお願いすることであると思う。

趣味の延長でも1つのグループ（ボランティア）と捉えてはどうだろうか。

年齢別のリーダーの育成が必要。
→誰がやるのか。具体的施策が必要

各自治会を中心に自治会ごとの話し合いをし理解を深めていくことから始める。

リーダーの育成は、少人数からだんだん大きくしていく。（やり方次第でできる。自分のところでは5年間かかった）

重要シール：2つ

ボランティア・福祉対象者名簿の作成。

気軽にボランティアに参加してもらうためには各団体自らリーダー役員が積極的に活動する。待っては何もできない。

関係団体・機関の連携

重要シール：2つ

コロナ禍でも関係団体が意見交換するためには？→現行のとおり文章によるやり取りしかないのではないか。高齢者にはインターネットやテレビ会議は難しいのではないか？

地域活動を促進する団体の連携、意見交換が必要。
→誰が先頭に立つか？

高齢者クラブ・民生委員児童委員・青年会議所・女性会など、関係団体が連携するためには？→基本的には、行政主導でそれぞれのリーダーが定期的に意見交換の場を設ける必要があると思う。

関係団体が連携するには各団体のリーダーが先頭に立って一同にして話し合いをすること。特に自治会との連携が必要。

地域の関係団体の活動状況がわかると良い。

関係団体が連携するためにはまず代表の集まりを設ける。

支援が必要な人の把握

支援が必要な人が声をあげられる関係には自治会のコミュニケーションが不可欠。

本当に支援が必要な人が声を上げることができるような関係をつくるためには？
→支援のほとんどが行政施策の中にある。支援を必要とする人の声を行政につなげるために、支所機能や社会福祉協議会の充実が必要であり、声を拾い上げる自治会や民生委員、地域の福祉ボランティア等であると思う。これらのつながりと拡充が重要である。

協和地区「安心して暮らせる環境づくり」の課題（第1回結果）



人権尊重のため支援できない範囲があると思う。

市と市民は書面のやり取りで、直接職員等との面談の機会がなく、福祉行政に対する理解は受けづらい。



できたらいいと思う取り組み（第2回結果）

支援が必要な人の把握

支援やサービスを必要とする人の掘り起しをするためには？→地域の自治会長と民生委員が常に聴く耳聞く耳を立てて、近所の状況把握に努める。

支援を必要とする人の把握、情報共有・体制の充実を話し合っていくこと。

支援を受ける人が「自分は支援が必要だ」と気づくには？→上記同様にする。また、行政からの周知が必要ではないか。

助け合いの精神を身につけてもらう。

各集落ご近所が一番わかっていると思う。人権尊重をどこまで開示できるか。

まず行政が先頭に立って考え地域の担当者を集めて話し合いをする。

住民同士の見守り

重要シール：2つ

自治会長、班長さんが配布物を配る時声かけをしてくれるとありがたい。現在はポストへ入れて行く。

若い世帯が安心して子育てでき、地域で子どもたちを見守り、育てることができると良いと思う。

月一度のリサイクル時に会員が集まるのでいつも来ない人の様子など話し合えれば良いかな。

自助・共助の取り組みは年次計画を具体的に策定することと多くの仲間づくりが必要（人の集まりを多くつくる）。私たちは5年間かかった。すでにできている（自治会の中で）。

地域の活動が見えるような参加しやすいイベントができると良いですね。

防犯・防災

地域全体で防犯や防災に取り組むためには？
→防犯は、自治会長や防犯連絡員が地域の交番・駐在所との連携を図り、警察官と市民が地域の巡回やパトロールに務めるようにする。防災では、市の防災計画に基づき市の広報活動を通して市民に周知徹底を図り、自治会長を中心とした各自治会が対応策を検討しておくように努める。また、対応策の検討には行政が支援する。

コロナ禍でもボランティアやNPOが活動を維持するためには？→当然のことながら、行政が活動する人の安全を確保すること。そして最悪の事態が発生したときはその補償を行う必要がある。

関係団体がそれぞれ訪問見まわりの必要（話し合いの中で）。

成年後見制度

成年後見制度の理解を深める。

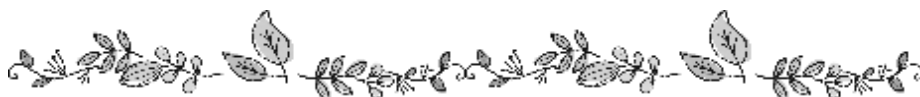
成年後見制度を担う市民後見人を増やすためには？→なかなか、一般の方の理解が得られないのが現状かと思う。賛否両論はあると思うが知識のある公務員を経験した人の中から集うのがよいのではないかと思う。

そのほか

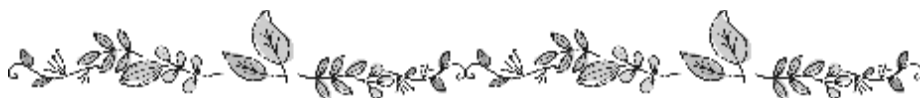
課題の内容を見ると、私たちから見た場合具体的な考え方を行政が提示してもらいたい。

重点プロジェクト

福祉意識の醸成	
内容	<ul style="list-style-type: none">● ボランティア、福祉対象者の名簿の作成。● 教育の充実(小さい頃からボランティアへの興味を持ってもらう)。



関係団体・機関の連携	
内容	<ul style="list-style-type: none">● 支所機能の充実。● 地域活動団体の意見交換。



住民同士の見守り	
内容	<ul style="list-style-type: none">● 地域の活動が見えるイベントの開催。● 三世代交流イベントが継続的に行えること(自治会中心)。